

日野富子は本当に悪女だったのか？

(日本三大悪女：北条政子、日野富子、淀殿)

2022年9月10日

我部山 民樹

1. はじめに

北条政子を調べていて、日野富子が三大悪女の一人と知った。

果たして富子は希代の悪女なのか？それとも、悲運にありながらも夫と息子のために必死に生き、幕府の屋台骨を支えた女性なのか？調べてみる。

日野富子は室町時代の将軍・足利義政の妻で、夫に代わって政治を動かし、跡継ぎ問題で応仁の乱の原因を作った女性と云われ、日本三大悪女の一人と云われている。確か、大河ドラマがあったと思い、調べてみて「花の乱」と分かった。

歴史的悪女について以下に記す。

大河ドラマを見ていて、北条政子が日本三大悪女の一人と知り、それまで「嫉妬深くて個性の強い人柄であるが、頼朝の偉業を助け、幕府の礎を築くことに貢献し、頼朝亡き後も鎌倉幕府を率いたしっかり者の女性」と漠然と思っていたので、驚いた。三人をいつだれがどのような悪女の定義に決めたのだろうか？

まずは「悪女」（あくじょ）のイメージは、男性を魅了して金品を巻き上げるとか、女を武器にして男を凋落して思いのままにあやつるとか、ライバルを無実の罪で陥れ次々と排除してしまうような「恐ろしい女性」である。しかし、辞典によると、意外にも悪女の定義は「①容貌の醜い女②性質の良くない女③男を魅了し、墮落させるような小悪魔的な女性。男を手玉に取る女」とある。そして「日本三大悪女」と言えば、昔から「北条政子」（ほうじょうまさこ）、「日野富子」（ひのとみこ）、「淀殿（茶々）」（よどどの）と言われていることを知る。別資料によると『歴史的な意味での悪女というと、世界で一致してくる。共通しているのは富と権力を持ち、己の欲望のために多くの人間を苦しめ、国1つの歴史を大きく動かした女性』とある。この定義からすれば、違和感がある。

『「日本三大悪女」を昔から、北条政子、日野富子、淀殿に決まっている。』となっているが、いつ、誰が、何を基準に決めたのだろうか？

また、別資料によると『「歴史的な世界三大悪女は中国の①呂雉（りょち）②西太后（せいたいごう）の絶対的2強に加え、3番目はイギリスのマリー・アントワネット」との説を唱える歴史家もいるが、候補者が多すぎて、歴史家の中では一致を見ていないようだ。

悪女のイメージを理解するために、まずは日本と世界の三大悪女の素顔を虚実取り混ぜてまとめてみる。のちの世に悪女を強調するために潤色や曲筆、あるいは創作があることは想定されるので、解釈の上ではそのことを当然考慮しなければならないだろう。

2. 歴史的悪女とされる女性について

史料が十分ではないので素顔が分かりにくいですが、後世ささやかれていることも含めて虚実取り混ぜて、その姿をまとめる。

2-1. 日本

歴史的悪女は「富と権力を持つ」とあるので、時の最高権力者の正室、側室、または愛人以上が該当すると思われるので、3人ともに当てはまる。果たして彼女たちは最高権力者を操って、あるいは最高権力者として権力を駆使したのだろうか？己の欲望のために多くの人間を苦しめ、ライバルの後継者候補を不当に遠ざけ、あるいは亡き者にして、政権や国家を危うくさせたのだろうか？

① 三人の人物像

○北条政子

1157年（保元2年）生まれ。伊豆（現在の静岡県伊豆市）の小土豪・北条時政（ほうじょうときまさ）の娘で、鎌倉幕府初代将軍「源頼朝」の正室。

長男は2代将軍「源頼家」（みなもとのよりいえ）、次男は3代将軍「源実朝」（みなもとのさねとも）。夫も息子も「鎌倉幕府将軍」となる。政子はまさに勝組の女性であるが、夫と4人（長男・頼家、次男・実朝、長女・大姫、次女）すべての子どもに先立たれてしまった悲劇の女性でもある。

政子は、頼朝の遠縁・「藤原頼経」（ふじわらのよりつね）（九条頼経、両親ともが源頼朝の同母妹・坊門姫の孫）を第4代将軍に招致して後見し、実家の北条家を執権（将軍を補佐し、政務を統轄した最高の職）とし、実質上の将軍として権力を握り続けた。俗に「尼将軍」（あま

しょうぐん、頼朝亡き後、出家し、尼御台所と呼ばれていた。) と呼ばれる。

一方「政子の実の子や孫が抹殺されて源氏本流が断絶したが、その背景に北条氏の暗躍があったことは疑問の余地が無いとされている。北条一族の政子が暗躍に無関係であったはずは無いが、一体どの程度関与したのだろうか。積極的に関与したのではないかとの疑念を持たれているので、悪女の烙印を押されているようだ。

○日野富子

1440年の生まれた。公家の名門・日野家の娘で、室町幕府8代将軍「足利義政」（あしかがよしまさ）の正室。富子はあいついで女子を産むが、なかなか男子に恵まれなかった。

足利義政は側室との間にも男子に恵まれなかったので、弟・「足利義視」（あしかがよしみ）を還俗（げんぞく、僧侶になった者が、戒律を堅持する僧侶であることを捨て、在俗者・俗人に戻る事をいう。）させて後継者としたが、その直後に日野富子が「足利義尚」（あしかがよしひさ）を懐妊する。

日野富子が我が子の将軍就任に執着し陰謀を企て、四職（ししき、侍所の長官）・「山名宗全」（やまなそうぜん）と手を結んだことにより、足利義視は管領（かんれい、将軍を補佐し政務全体を管理）・「細川勝元」（ほそかわかつもと）と手を結ぶことになる。そうして1467年に将軍継承者を争う「応仁の乱」が勃発したと言われ、希代の悪女とみなされるようになった。

その結果、1473年、富子の期待通りに9代将軍・足利義尚が誕生する。応仁の乱は約11年間続き1477年に終結するが、結果的には京都の街は荒れ果て、将軍の権威は失墜してしまう。日野富子は戦乱で苦しむ庶民をよそに巨万の富を築いて「財産を蓄え続けたとして批判を浴びる。両軍の大名に多額の金銭を貸し付け、また米の投機も行うなどして、一時は現在の価値にして60億円もの資産があったとされる。

我が子・義尚が25歳で病死すると、政子は義視と自分の妹・良子の間に生まれた足利義材（あしかがよしき、後の義植）を将軍に擁立するよう夫・義政と協議し、同年4月に合意が行われた。1490年正月に義政が没すると、義材が10代将軍となった。しかし後見人となった義視は権力を持ち続ける富子と

争い、富子の邸宅・小川邸（こかわてい、小川御所とも）を破壊し、領地を差し押さえた。翌年の義視の死後、親政を開始した義材（義植）もまた富子と敵対した。

1493年、義材が河内に出征している間に富子は細川政元と共にクーデターを起こして義材を廃し、義政の甥で堀越公方（伊豆堀越にあった室町幕府の東国支配機関）・足利政知の子・義澄（よしずみ）を11代将軍に就けた（明応の政変）。興福寺大乘院の高僧・尋尊（じんそん）は、「クーデターを起こした細川勝元の館に富子が詰めており、ことごとく指南申す」と陣頭指揮を執っていたことを記している。度肝を抜く富子の決意と行動力だ。

その3年後、1496年に富子は57歳で死去した。

自らの権力を持ち続けるために我が子の将軍就任に執着し、11年間に及ぶ応仁の乱を引き起こし、あげく将軍の権威を失墜させたとすれば悪女の条件を満たしていることになる。

○淀殿（茶々、ちゃちゃ）

1567年（永禄10年）生まれ。

天下人・豊臣秀吉に溺愛された女性。天下一の美女とうたわれた織田信長の妹・お市と戦国武将・浅井長政（あざいながまさ）の長女で、豊臣秀頼の生母。父と兄を叔父・信長との戦いで失い、母・お市とその再婚相手の柴田勝家を秀吉との戦いで亡くした後、淀殿は秀吉の側室になったという波乱万丈の生涯を送った。秀吉の愛情を一身に受けたとか、秀頼の後見人となって政治に介入し、結果、豊臣家の断絶に繋がったとかによって「悪女」呼ばわりされるのだが、見方を変えると秀吉の死後も豊臣家を守り続けようとして懸命に生き抜いた女性とも言える。

正室・「ねね」（北政所）が子宝に恵まれなかったことから、側室であるにもかかわらず、「御台所」（みだいどころ）と呼ばれ、権勢を振るった。しかし、当時より秀頼が秀吉の実子でないと疑われ、あるいは実子ではないと信じこまれたようだ。宣教師・ルイス・フロイスは秀頼の兄・鶴松についても実子を否定した記録に残している。（*1）秀頼の本当の父親をめぐって、淀殿は江戸時代になって太閤記や軍記等で淫乱女とかのひどい扱いを受け、とんでもない女性になり果てた。それらはフィクションもあり、いちいち取り上げるまでもないが、現在でもその余韻が残っているようだ。

*1.

ルイス・フロイスによると、「鶴松（秀頼の兄）は秀吉の子供でないと密かに信じていること、淀殿（茶々）の懐妊は笑うべきこと、また秀吉の子供である

と信じる者もいなかった」と表記している。当然、秀頼に対しても思いは同じであろう。

ルイス・フロイス；ポルトガルのカトリック司祭、宣教師。イエズス会士として戦国時の日本で宣教し、織田信長や豊臣秀吉らと会見。戦国時代研究の貴重な資料となる『日本史』を記したことで有名。

② 三人の性格と悪女とされた要因

	北条政子	日野富子	淀殿
身分	鎌倉幕府征夷大將軍・源頼朝の正室	室町幕府第 8 代將軍・足利義政の正室	太閤殿下秀吉の側室
性格	<ul style="list-style-type: none"> ・気が強い女性で、周囲の言いなりにならなかったエピソードがいくつも残っている。 ・嫉妬深い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夫・義政の側室 4 人を追放したかなり嫉妬深い女性 ・最期まで権力を持ち続けようとした相当気の強い女性 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝ち気で気位が高く、ヒステリックであったと言われている。 ・心優しい性格であったとも言われている。 ・世間知らずと云われている。
悪女とされる要因	<ul style="list-style-type: none"> ・頼朝の浮気相手の「亀の前」の住んでいた屋敷を打ちこわし、さらにその女性を追いやってしまう。 また源頼朝が他の女性と接することを好まず、結果的に後継者不足となる。 ・1193 年、曾我兄弟仇討ち事件(*1)がきっかけとなり、北条政子は頼朝の弟・源範頼に謀叛の疑いがあると源頼朝 	<ul style="list-style-type: none"> ・義政は世継ぎがなかなか生まれなかったため、僧侶になっていた義政の弟・義視(よしみ)を呼び戻したが、翌年に富子が男の子を生んだ。我が子の將軍就任に固執したので、富子は義視が邪魔になってしまう。このゴタゴタから、京都を焼き尽くした 10 年間にも及ぶ「応仁の乱」が巻き起こった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪の陣で徳川家康に抵抗したことで、結果、豊臣家を滅亡に導いたと言われること ・これまで実子(*2)のいなかった秀吉の子供を身ごもった事から、石田三成や大野治長との不義の噂が当時から流布していたこと

に讒言する。源範頼は頼朝に臣従をしていたが、猜疑心の強い源頼朝に審議を受け、結果、源範頼は殺されてしまう。

・政子の実子・頼家が2代将軍になったが、将軍就任後は北条家よりも妻妾・若狭局（正室不詳）の実家・比企家を重視。これに対して北条家は1203年に北条政子の名で比企家を討伐。さらに頼家は政子により出家を命じられ将軍の座を追われ、幽閉された。あげくに、最後は暗殺された。頼家は不肖の息子で鎌倉幕府を束ねていく力はなく、さらには母の実家である北条家も軽視をした。

頼家が排除される理由はいくつもあったようだが、政子は息子・頼家を守ることなく死に追いやったとみられている。

・乱の最中も、日野富子は私財を蓄え続けて、批判を浴びる。

・我が子の9代将軍義尚が死去した後、将軍の去就に深く関わったとして、彼女が悪女と呼ばれる一因となっている。

	<ul style="list-style-type: none"> ・実子の3代将軍実朝が暗殺され、母である北条政子が実質的な統治者となり「尼将軍」と言われるようになる。実朝暗殺の関与が疑われる。 ・1221年、承久の乱（後鳥羽上皇が再び上皇中心の政治を取り戻すべく、鎌倉幕府を討ち滅ぼそうとして起こした戦）に勝利して、北条政子は、敵対した後鳥羽上皇を隠岐の島へ流罪にする。時の上皇を流罪に追い込んだので、後世まで批判を受けることになった。 		
<p>評価できるところ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・夫・頼朝の弟である義経の愛妾・静御前とその子を庇うなど、とても愛情深いエピソードがある。 ・家中のいざこざの仲裁をしたり、後には将軍の代行を務めたりと、必死に夫・頼朝の創設した鎌倉幕府を守ろうとした、芯の強い女性。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日野富子の行動の背景には、一貫して幕府を守る、という意志が働いていた。義政が十分に政治手腕を発揮できない状況にあったことが、そもそもの発端となっているのかもしれない。 ・息子・義尚は23歳という若さでこの世を去る。その最後は酒におぼれ、重い病 	<p>秀吉の死後も豊臣家を守り続けようとして懸命に生き抜いた女性。</p>

		に雇っていた。その後、夫・義政も亡くなる。二人の死後も、幕府の運営や人事に発言力を持ち、幕府の屋台骨を支えた。悲運にありながらも夫と息子のために必死に生きた女性の姿も見えてくる。	
--	--	-------------------------------------------------------------------------------------------	--

*1. 曾我兄弟の仇討ち事件

赤穂浪士の討ち入りと伊賀越えの仇討ちに並ぶ、日本三大仇討ちの1つである。

<p>建久4年（1193年）に源頼朝が富士の裾野で行った大規模な巻狩り（富士の巻狩り）の際、現在の富士宮市上井出の地で、兄・曾我十郎祐成（すけなり）と弟・五郎時致（ときむね）が父の仇である工藤祐経（すけつね、頼朝の寵臣）を討ち果たした。仇討ち成就後、兄弟は御家人と戦闘になり、兄は討ち取られたが、弟・時致は將軍頼朝を目掛けて走り、頼朝はこれを迎え討とうと刀を取ったが、御家人・大友能直がこれを押し留めた。この間に弟・時致は取り押さえられ、大見小平次が預かることで事態が落ち着くこととなった。</p> <p>事件の発端は、伊豆にある工藤祐経（すけつね）の領地をめぐる、工藤祐経と曾我兄弟（伊藤祐泰の子、曾我家に養子に出された）の祖父・伊東祐親（すけちか）の所領争いに始まる。領地を奪われた工藤祐経が伊東祐親を暗殺しようとしたが、かなわなかった。が、近くにいた伊東祐親の嫡子・伊東祐泰（すけやす、曾我兄弟の父）を誤って殺してしまうとある。（領地奪還の為なら、始めから伊藤祐親・祐泰親子を暗殺するつもりだった可能性もある。）当時幼かった曾我兄弟（母親が兄弟を連れて再婚）は静かに闘志を燃やしながら成長し、兄・十郎が22歳、弟・五郎が20歳の時、仇討ちを遂げた。兄・十郎は討たれ、弟・五郎は捕縛されて鎌倉へ護送される途中、鷹ヶ岡で首を刎ねられた。この鷹ヶ岡が、現在の富士市鷹岡の地であるといわれ、兄弟にまつわる史跡がこの地に数多く残されている。</p>

三人の人物像と悪女とされた要因をまとめる。

○呂雉（呂后）

漢の高祖・劉邦（在位：前 202～195 年）の皇后。呂后の治世に関して司馬遷は「天下は安定していて、刑罰を用いることはまれで罪人も少なく、民は農事に励み、衣食は豊かになった」と評価する一方で「性格は残忍で猜疑心が強く、息子が亡くなっても悲しまず、天下を私し、功臣や王族を陰謀により陥れて残酷に族滅（一族を一人残らず殺し滅ぼす）し、無能卑賤な呂氏一族を要職に就けた。その悪逆非道は世に隠れも無い」と非難した。

○西太后

元々、清の第 8 代皇帝・咸豊帝（かんぽうてい、在位：1850～1861 年）の第 2 夫人だったが、男子（のちの同治帝）を産んでから西太后とよばれた。
・咸豊帝に愛されていた麗妃（れいひ、側妃）の莊静皇貴妃（そうせいこうきひ）に嫉妬した西太后は帝の死後、麗妃の手足を切断し、生かしたまま、瓶に入れた。（のちの世の創作説もある）

・自分の息子・第 10 代皇帝・同治帝が西太后の命令に服さないので暗殺した。

・同治帝の身重の后を紫禁城内の京劇の舞台上に吊り上げ、落として殺した。

・死期を悟った西太后は自分の死の一日前に、よく思っていなかった甥の第 11 代皇帝光緒帝を毒殺した。（毒殺であることは明確になっているが、誰が毒殺したのかは明確ではない。）

○マリー・アントワネット

フランス王ルイ 16 世（1754～1792 年）の王妃。ハクスブルック家出身で母親はオーストリアの女大公であり、ハンガリー女王のマリアテレジア。

フランス革命で、国民のヘイトの対象になりギロチンにかけられた。

ヘイトされた要因を列記する。

・王妃自らベルサイユの宮廷の模範とならなければいけない立場の中でそれを逸脱した行為や言動により、保守的な貴族を中心に大きな抵抗勢力が宮廷内に形成されるようになった。

・浪費家で市民の生活に疎く、思慮が浅く派手好きで遊ぶことに熱中していたイメージが強い

・派手な服や髪型の追求、観劇や舞踏会などにばかり熱心で公務にはあまり力を入れない。それに心を痛めた母親・マリアテレジアが忠告の手紙を送ったほど。

これには異論が噴出するだろう。マリー・アントワネットは個人的には意外に思われる。賢くなく、世間知らずなだけのような面があり、とくに調べたわけでは無いが、もっと比較にならないほどの悪女がうようよしているように思われる。

3. 日野富子は歴史的な大悪女なのか

○木像の富子像



京都の宝鏡寺に安置されている。
宝鏡寺第15世溪山禅尼（けいざんに）
は義政と富子の息女

○日野富子の墓

京都の華開院（けかいいん）の右側の宝篋印塔（ほうきょういんとう）が日野富子の墓と伝わっている。意外に質素だ。



○京都の華開院



・日野富子は悪女として名高い。だが、歴史的人物はしばしば都合の良いように造形されてしまう危険性がある。果たしてどのような女性だったのであろうか。「木像からは、丸く剃った顔、長い目が、洞察力の鋭さをあらわし、整った鼻と、一文字に結んだ口が、大き目の丸顔の良く収まっている。顎が張り意志の強さを表している。」（吉見周子氏、日野富子とその時代）

・「当時、尊顔はなはだ美なりと評されていたので美人と言える。よく気の付く細やかさと、おおらかで包容力のある性格だった。」（森本房子氏；将軍義政の妻として、女として）

・「経済的な手腕に長けた女性というだけでなく、和歌等の文化の面でも政治・経済活動と同様に非凡な才能を発揮した、中世の女性のうちで最高峰の文化人といってよいだろう。」（諏訪勝則氏；文化人としての日野富子）

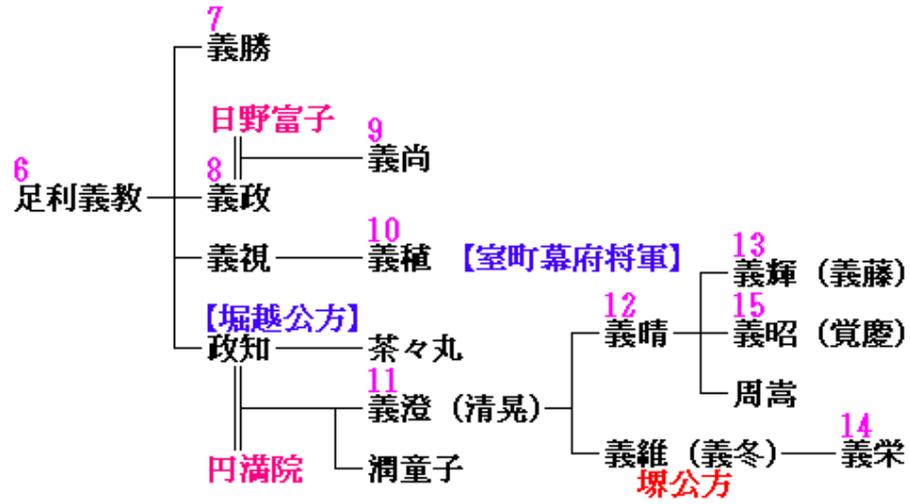
富子の和歌

・偽のある世ならずは一かたにたのみやせまし人のことのは
意識

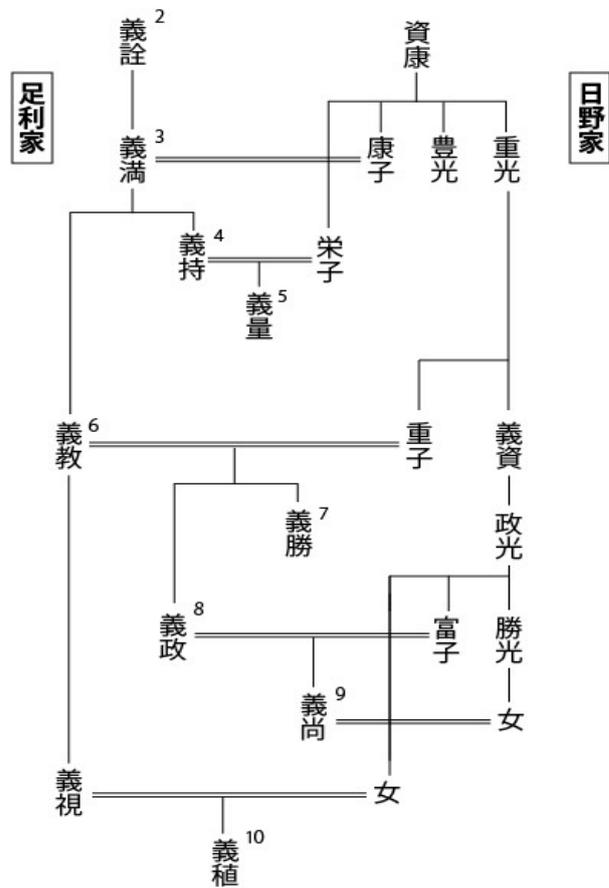
もし偽のない、お互いに信頼できる世の中であるならば他人の言うことも信じられるのだが、はたして誰に頼ってよいのだろうか（夫・義政に対する不満、あるいはあきらめの気持ち？）

3-1. 家系図

○足利家

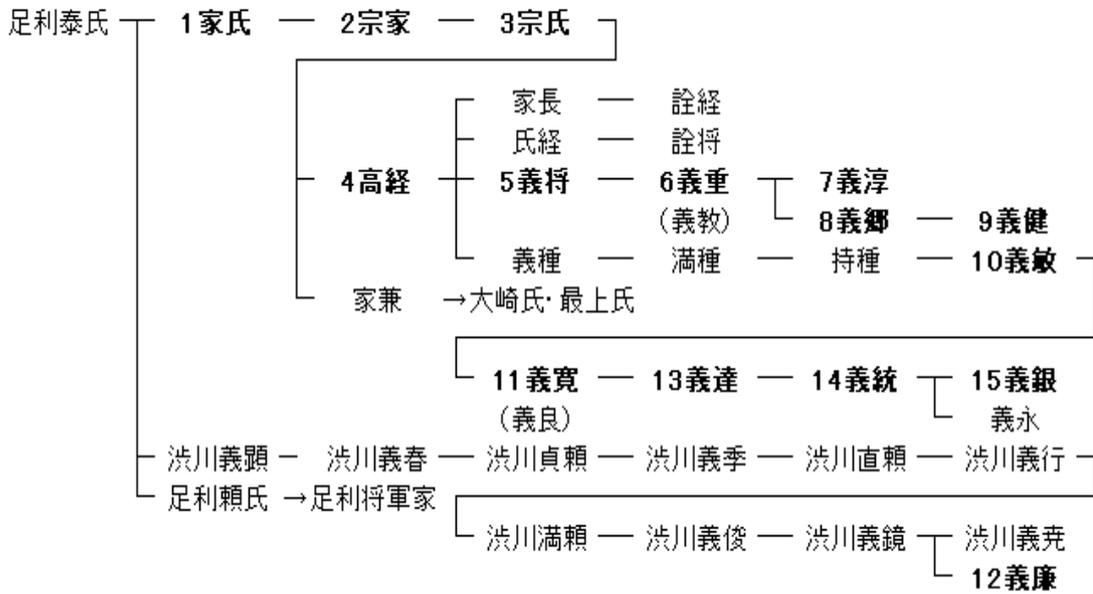


○足利家と日野家の相關図



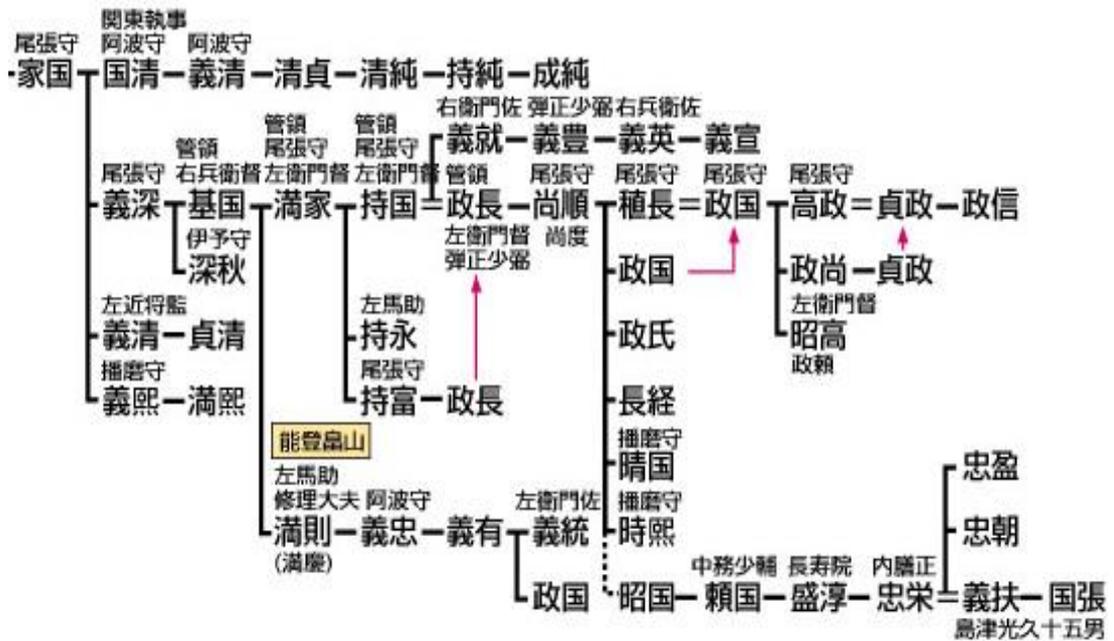
○斯波氏家系図

斯波氏略系図



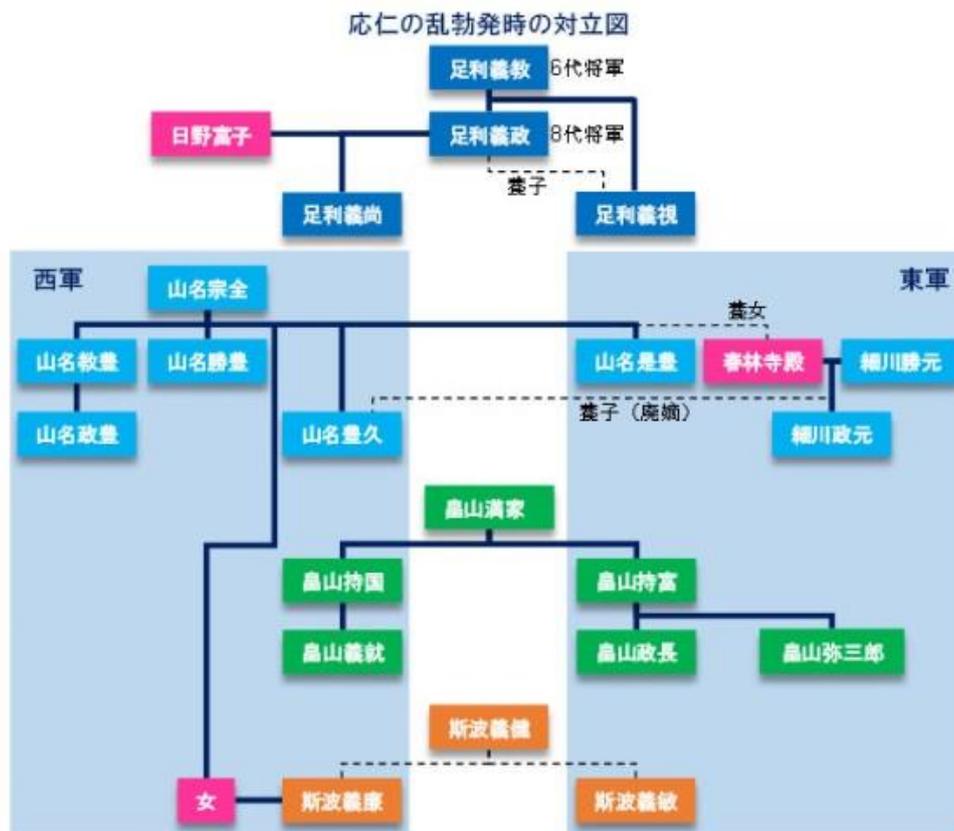
義政により義敏が追放された後、斯波義廉（しばよしかど）は渋川家から斯波氏の武衛家（宗家）を継承

○畠山氏家系図



持国が政長を継嗣として養子にした後、実子・義就が生まれ、政長を廃嫡した。

3-2. 応仁の乱勃発時の対立図



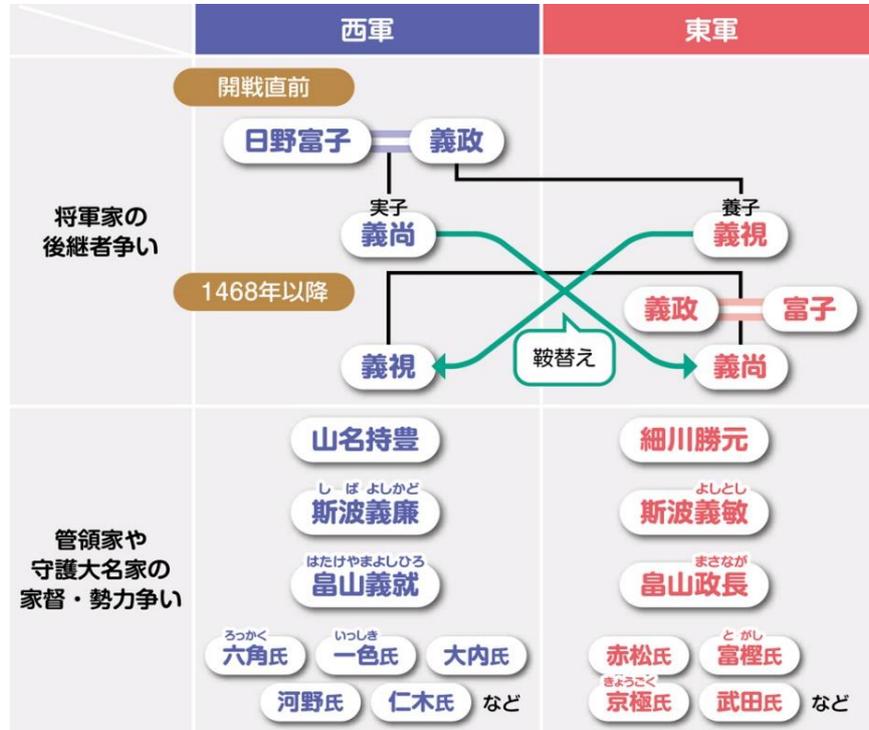
・将軍足利義政が次期将軍に弟・義視を還俗させて次期将軍に指名するが、その後、実子・義尚が生まれ、義視と義尚との間で跡目争いが起こり、義視の後見人・細川勝元と義尚の後見人・山名宗全の間で対立が生じる。

・山名宗全の娘(養女)・春林寺殿が細川勝元の正室。継嗣がないので、宗全の子息・豊久を養子に送り込むが、勝元の実子・政元が生まれて、豊久が廃嫡され、宗全と勝元が対立することになる。

・畠山持国は長いこと男子が生まれなかったもので、弟・持豊の息子・政長を跡継ぎとしたが、晩年になり、実子・義就が生まれたので、後継ぎを義就に変えたので、家督争いとなり、宗全と勝元がそれぞれに陣営を支援したので、宗全と勝元の間で対立が生まれた。

・斯波氏の家督争いで、宗全は娘婿の斯波義廉を支援し、勝元は斯波義敏を支援する。

3-3. 西軍と東軍の相関図



1468年、富子は宗全を裏切り、勝元に働きかけ、勝元も富子に応じて義尚の後ろ盾となった。困った義視は出奔し西軍に駆け込み、今度は宗全が義視の後ろ盾となった。これ以降、敵味方が入れ替わってしまった。富子が裏切った背景は分からないが、勝元に義尚の後ろ盾になってもらった方が有利と判断したのであろう。

3-3. 主な出来事

日野富子 足利義政 斯波氏 畠山氏

年度	主な出来事
1451年	足利義政の乳母で側近の今参局（いままいるのつぼね）が口入れし、斯波氏の守護代・織田敏広（おだとしひろ、管領斯波氏の家臣。尾張国上四郡の守護代）に替えて一族の織田郷広（一度逐電したが、守護代の再任を計るために今参局に働きかけた）を守護代にすることを進言し、義政より赦免の内諾を得る。しかし、甲斐常治（かいじょうち、斯波氏の執事）の意を受けた義政の生母・日野重子（ひのしげこ）がこれに怒り、今参局が政道に口を挟む

	<p>ことを義政に忠告しても耳を貸さないので、室町亭から姿を消したことがあった。義政は今参局の意向 (*3) 通りに動こうとしたが、畠山持国（河内の守護大名）、細川勝元（丹後、摂津、土佐、佐貫、伊予国の守護大名）、山名持豊（または宗全、山城の守護大名）ら幕府首脳部の強い反対にあい、これを思いとどまり反故にした。守護大名家の人事に介入する今参局の口入れは幕府内に強い衝撃を与えた。</p>
1455 年	<p>日野富子 16 歳で足利義政の正室となる。</p>
1458 年	<p>將軍義政の異母兄である初代堀越公方（伊豆国の堀越にあった幕府の関東における出先機関）の足利政知（あしかがまさとも、義政の異母兄）の関東経略に進展が見られないことから、その救援のため、9 月に越前の守護大名・斯波義敏（しばよしとし）および斯波氏執事・甲斐常治（かいじょうち、斯波氏を事実上取り仕切って、主家をないがしろにしていた）が関東への出兵を命じられた。だが対立関係にあった両者は互いに警戒して動かなかった。</p>
1459 年	<ul style="list-style-type: none"> ・1 月、越前の斯波義敏派と甲斐常治派の衝突が再燃した。 ・義政の怒りを買った守護大名・斯波義敏は、息子の松王丸（義寛）に家督を譲らされ、周防の守護大名・大内教弘（おおうちのりひろ）の元へ追放された。京都にいた甲斐常治は死去した。 ・富子に第 1 子が生まれるが、その日のうちに夭折した。それを義政の乳母で側近だった今参局（いままいるのつぼね）が呪いを掛けたせいだとし、重子（興福寺尋尊が書き残している）が局を琵琶湖の沖ノ島に流罪とし（局は途中で自刃）、さらに今参局派だった義政の側室 4 人も追放した。陥穽（かんせい）に落ちて自滅したのだ。
1461 年	<ul style="list-style-type: none"> ・室町時代最大の飢饉である「寛正の大飢饉」が起こった。 ・この惨状の中、義政は救済や対策をすることなく、莫大な費用をかけて、3 代將軍・義満が造営した「花の御所」（足利將軍家の邸宅）の再建にとりかかる。これを見かねた後花園天皇が義政に諫める和歌を送り、ようやく工事が中断された。 ・8 月、幕府の関東政策により、松王丸に替わって堀越公方執事・渋川義鐘（しぶさわよしかね）の子である斯波義廉（しばよしかど、母親；かつての守護大名・斯波義将の娘）が武衛家（斯波氏宗家）を継承した。
1462 年	<p>富子、女兒を産む</p>

1463 年	<p>義政は政治に嫌気がさし、仏門に入っていた実弟・義尋（ぎじん）を再三再四説得し、もし男子が生まれても決して将軍職を返せとは言わないと誓約した。富子は実弟が承諾した後になってこのことを知り、異議を唱えた。25 歳でまだまだ子供を産める年齢である。おそらく驚愕し、憤りを感じたことだろうと推測する。富子は義政に異議を唱え、撤回を求めた。</p>
1464 年	<ul style="list-style-type: none"> ・富子は、衰微する皇室費用御用達のため、後土御門新天皇のいる宮中に足しげく出入りしている。（応仁広記） ・義政は実弟を還俗させ、名を足利義視（あしかがよしみ）と改めさせ、将軍後継者とし細川勝元を後見人とした。
1465 年	<p>11 月、義政と富子の間に若君（のちの足利義尚（あしかがよしひさ））が生まれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若君誕生のわずか 2 日前、義政は、義視が後継者であることを宣言するために元服式を挙げさせた。 ・富子は義政に我が子を将軍継嗣にするように懇願した。そしてそれまでは隠居しないようにと。
1466 年	<ul style="list-style-type: none"> ・7 月、富子の妹・日野良子が義政と富子の勧めで、義政の弟・足利義視の正室となる。 ・8 月、幕府は斯波義敏を武衛家家督に復し、尾張・遠江・越前 3ヶ国の守護に任じた。家督を奪われた斯波義廉は岳父・山名宗全を頼り、一色義直（丹後の守護大名）・土岐成頼（美濃の守護大名）らも義廉に味方する。 ・富子は溺愛する義尚の擁立を目論み、義視の後見人の細川勝元とほぼ互角の山名宗全を義尚の後見人に頼った結果、日野家が義視と対立した。（*4） ・管領細川勝元の妻は宗全の娘（養女とも）であり、勝元に継嗣がいなかったため、山名宗全は我が子・豊久を養子として送り込んだ。しかし 1466 年、勝元に実子の政元が生まれると豊久は廃嫡され、仏門に押し込まれた。この一件が宗全と勝元の対立を生み、応仁の乱勃発の一因になったと言われている。
1467 年	<ul style="list-style-type: none"> ・1 月、斯波義廉は山名宗全派と手を組んでおり、斯波義敏の支持者だった元管領細川勝元ら諸大名も伊勢貞親ら将軍側近衆には反感を抱いていたため、問題は複雑化した。斯波義敏は伊勢貞親・真薬・赤松政則らとともに「文正の政変」によって失脚し、14 日に守護職は斯波義廉に戻された。

	<p>・畠山持国は長いこと実子にめぐまれなかったため、弟・畠山持富の子・政長を養子として、家を継がせる約束をしていたのである。しかし、皮肉なことに、持国の晩年になって、遊女に実子・義就が生まれた。（持国の実子かどうか疑わしいともいわれている）そして跡継ぎを義就に変えたため、畠山義就派と畠山政長派の争いが起こった。</p> <p>・宗全・義廉らは勝元派の排除も狙い、大和で挙兵した畠山義就（はたけやまよしなり）を呼び寄せる。</p> <p>義政により畠山政長（守護大名）は家督を義就（政長の従兄弟）に替えられ、さらに管領を罷免された。宗全が義政に強請して勝元が支援する畠山政長の管領職を取り上げて出仕停止処分に処し、代わりに宗全が支援する斯波義廉を管領に任命させたのである。ここに至って、勝元と宗全の武力衝突は避けられないものとなった。</p> <p>・斯波氏の家督争いは足利將軍家の家督争いや畠山氏の家督争いと複雑に絡んで応仁の乱の原因の一つにもなった。</p> <p>応仁の乱、勃発（*5）</p>
1468年	<p>富子は山名宗全を裏切り、細川勝元も富子に伝えて義尚の後ろ盾となった。これに居場所がなくなった義視は出奔し西軍に駆け込み、今度は宗全が義視の後ろ盾となる。敵味方が入れ替わった。富子は細川勝元を総大将とする東軍側にいたが、東西両軍の大名に多額の金銭を貸し付け、米の投機も行うなどして、一時は現在の価値にしておよそ60億円もの資産があったといわれる。</p>
1470年	<p>義政は若君（のちの義尚）を將軍継嗣に定めた。</p>
1471年頃	<p>・乱を避けて室町御所（足利將軍家の邸宅）に避難していた後土御門天皇（ごつちみかどてんのう）と富子との密通の噂が広まった。当時後土御門天皇が富子の侍女に手を付けていたことによるものだったが、富子の密通の噂（*6）が流れるほど義政と富子の間は冷えこんでいた。</p> <p>・義政は小川御所を利用するようになった。政を避け、これまでも増して酒色におぼれたとされる。（同居を避けた）</p>
1473年	<p>山名宗全が死去し、追うように細川勝元も死去した。が、その後も東軍は細川政元・畠山政長・赤松政則、西軍は畠山義就・大内政弘・土岐成頼を中心に戦いは続けられた。</p>

1474 年	<ul style="list-style-type: none"> ・義尚が9代将軍に就任。就任当時はまだ9歳であり、政務の実質は義政・富子夫妻と富子の兄・日野勝光が中心となっていた。 ・義政は完全に政治への興味を失って、富子と別居し、新造の小川御所に移って、銀閣寺の建設に取り掛かった。 ・義政が造営のため費用捻出に苦心していたときは、富子は一銭の援助もしていないことから「天下の悪妻」とも呼ばれた。 <p>実際には義政が決して手放さなかった財源があった。(*7)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後に朝廷の御所が火災で焼け、修復するため膨大な費用が必要になったときは富子が自身の蓄財から修復費を賄った。
1476 年	<ul style="list-style-type: none"> ・室町御所の焼失とともに富子、義尚、そして応仁の乱を避けて室町御所に避難中であった後土御門天皇が北小路殿(足利将軍家の邸宅の一つ)に退避した。そして義政は小川御所に移った。富子の居室を増設した。(同居を避けた) ・富子の兄の将軍代・日野勝光がなくなると、富子が実質的な幕府の指導者となった。
1477 年	<ul style="list-style-type: none"> ・西軍の軍は引き上げ、京都における戦乱は終止符を打った(*8) ・富子は義尚を連れて小川御所に押しかける。
1478 年	<p>京都七口関(京都と七つの街道を結ぶ入口に設置された関所)が設置され関銭を徴集していた。この関所の設置目的は土御門内裏修理を名目とし、実際に修復費を出した。</p>
1480 年	<ul style="list-style-type: none"> ・京都七口関が新設された。この関所の設置目的は内裏の修復費用の捻出というのが口実であったが、富子の個人的な蓄財の為だという疑惑を呼んだ。(内裏の修復は終わっていた?) <p>激昂した民衆が徳政一揆を起こして関所を破壊した。富子は財産を守るために弾圧に乗りだし、一揆後はただちに関の再設置に取りかかったが、民衆だけでなく公家の怨嗟の的となった。</p> <p>富子は戦乱で苦しむ庶民をよそに巨万の富を築いた「悪女」「守銭奴」と庶民に評されたが、荒廃した京都の復興のための財源だったともいわれている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・義尚が父・義政の愛妾に手を付け(*9)、欲したために、義政と義尚とが激しく口論、義尚と口やかましい富子が衝突した。
1483 年	<ul style="list-style-type: none"> ・6月、義政は建物がある程度完成した東山山荘に移り住み、以降、義政は「東山殿」、義尚を「室町殿」と呼ぶこととなった。 <p>だが、実際には義尚は多くの分野で義政の承認が無ければ裁許を行うことが出来なかった。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・義尚は富子を北小路殿に残し、伊勢貞宗邸（義尚の養育係で、義尚の信任を得て幕政全般を統括するようになった）に移転し、酒色に溺れた。このため富子は一時権力を失った。
1489年	<p>幕府奉公衆の土地を押領した六角高頼（ろっかくたかより、近江国守護大名）の討伐（長享・延徳の乱）のため遠征中の義尚が25歳で病没した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東山山荘に観音殿（銀閣）が上棟された。
1490年	<ul style="list-style-type: none"> ・1月、義政は銀閣の完成を待たずして義尚の後を追うように死去した。 ・7月、富子は義視と自分の妹・良子の間に生まれた足利義植を10代将軍に擁立した。 ・義植の後見人となった義視は権力を持ち続ける富子と争い、増設した富子の居室を除いた小川御所を破壊し、領地を差し押さえた。
1491年	<p>義視が死去し、義植が将軍に就任。義植は、就任時には政務は当時管領だった政元に任せるとした。</p>
1493年	<ul style="list-style-type: none"> ・義植は成長する親政を開始し、義植擁立の功労者であった富子や、細川政元（一時管領となったがすぐに辞任）とは対立を生じるようになった。政元はもともと義澄支持派（義植の擁立に反対）だった。 <p>義植は細川政元の反対を押し切って近江と河内に出陣した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・義植が河内に出征している間に富子は細川政元と共にクーデターを起こして義植を廃し、義政の甥で堀越公方（幕府の東国支配機関）・足利政知（義政の弟）の子・義澄を11代将軍に就けた（明応の政変）。
1496年	<p>富子、57歳で死去。</p>
1508年	<p>義植は幽閉されていたが、小豆島に流罪されると知り、側近の手引きで京都を脱出し、巡り巡って周防の大内氏に身を寄せていた。この年、前将軍・義植を擁立する大内義興が上洛の軍を起こしたため、義澄は近江国へ逃れて将軍職を廃されたが、復帰できないまま死去した。やがて義植は将軍職に再任された、鎌倉・室町・江戸の3幕府の将軍の中で唯一、将軍職を再任された人物でもある。</p>

*3. 今参局の意向

1451年、今参局が尾張守護代問題に口入れし、織田敏広（おだとしひろ、管領斯波氏の家臣。尾張国上四郡の守護代。）に替えて一族の織田郷広（一度逐電したが、守護代の再任を計るため8代将軍・足利義政の乳母・今参に働きかけた。今参局の進言で義政より赦免の内諾を得る。しかし、甲斐常治の意を受けた義政の生母・日野茂子がこれに怒り、困惑した義政が赦免を反故にしたことにより断念した）を守護代に据えようとしたことは、幕府内に大きな波紋をひき起こした。義政は今参局の意向通りに動こうとしたが、畠山持国、細川勝元、山名持豊ら幕府首脳部の強い反対にあい、これを思いとどまった。義政の生母・日野重子が嗟嘆に隠居しようとしたのも、このときの今参局の口入れを受け入れた義政に怒ったためといわれている。

【今参局は義政を操縦し、大臣執事のように権威を振り、傍若無人との記録も残っている。禅僧雲泉大極の日記に「今参局は義政の愛妾」と書かれている。乳母は乳を与え、肌に触れ、手塩にかけて育てるので、母親以上に愛情が湧く。物心がつくと乳母は身をもって性教育し、双方に性愛が育っていく例はさほど珍しくはなかった。】「森本房子氏；将軍義政の妻として、女として」

義政が今参局の言いなりになっていたことを考慮すると、その可能性は否定できない。

*4. 富子が山名宗全を後見人に（応仁記）

室町時代後期の軍記物・応仁記（作者、作成年月日共に不明、史料的価値は低いが信憑性はあるとされている）を引用する。

【そうしたところ、御隠居のことが延引した。その理由は、御台所（日野富子）が御懐妊されたことであつた。

人々が噂し合っているうちにほどなく誕生されて、若君でいらつしやつたので、桑の弓、蓬の矢の慶賀が天下に聞こえ、京中の道俗は、「あっぱれ大果報の若子だ」と言わない者はいなかつた。

御台所は、「なんとかしてこの若子を世に立てたい」と思ひ召し、今出川殿（足利義視）を疎んずる心底が見えた。「何か不思議なことが起こらないか」と思ひ召される心根が、やがて天下の乱となつたのである。

やがて御台所はじつと御思案されて、「諸国の大名・小名の中でも山名金吾（持豊）ばかりは、一族も多く、諸大名にたくさん媚がいる。威勢は並び

無い」と思し召された。そして、ひそかにこの入道を頼んで若子（後の足利義尚）を世に立てようと、自ら書状をしたためられた。

その書状には、次のようなことが書いてあった。

「若君を山名殿にまかせようと思います。彼の生涯の御進退を、何とかして計らってください。私は三十を過ぎて、優曇華の花を待つ心地がしてからようやくもうけた若君を、剃髪染衣の形にやつさせることは、嘆かわしく、物思いの種となりましょう。それは不本意なことです。どうかこのことを人に洩らさないでください。」

このように山名に伝えた。

持豊入道がこの書状を受け取ってすぐに考えたのは、次のようなことであった。

「細川右京大夫勝元が今出川殿（足利義視）の後見として御父のように振るまい、沙汰するありさまは並ぶ人のいないかのようなのである。今出川殿が公方（将軍）になれば、我らのためには良くないことになろう。勝元は我らの婿でありながら、入道の敵の赤松次郎法師（政則）を取り立てようとしているのは無念の次第である。こうなったら、この入道も覚悟を決めよう。今、御台の仰せに従って若君を預かり申し、畠山義就を取り立てて政長を追放すれば、政長は勝元の一味なので、きっと勝元は政長を助けて合力するに違いない。その時、同罪として、赤松以下、一味の一族を追放しよう。そうすれば、味方の力はたちまち大きくなるだろう。」

こう考えて御台所に、「御内書の旨、かしこまって承りました」と、御返事された。】

*5. 応仁の乱のきっかけ

①将軍家のお世継ぎ問題

足利義政と富子の間に男子が生まれず、義政は出家していた実弟を還俗させ、義視と名づけて後継者とした。ところが翌年、富子が義尚を産み、義尚の後見人に山名宗全を付けた。義視の後見人の細川勝元に対抗したためと思われる。宗全と勝元が反目することになった。義尚が将軍に就くことを強く望み、義政も後継者の変更を申し出た。当然、それまで世継ぎとされていた義視は反対した。将軍家は義視派と義尚派にわかれた。

②山名宗全と細川勝元の衝突

勝元の正室は宗全の娘であるが、継嗣がいなかったため、宗全の息子・豊久を養子にもらい受けたが、実子が生まれると豊久は廃嫡され、仏門に押し込まれた。このことによる反目が乱の一因と云われているが、むしろ主要因ではなかろうか？宗全は勝元と争うための口実をさがしていたのではなかろうか？

③斯波氏の義敏と義廉の家督争い

義父の宗全らは義廉の義父・山名宗全は義廉を支持し、いっぽう義敏は勝元を頼ったため、宗全と勝元が反目することになった。

④畠山氏の政久と義就の家督争い

勝元が政久に味方し、義就が宗全に頼ったため、勝元と宗全が反目することになった。

山名宗全と細川勝元は元々一触即発の状態であり、いずれ衝突は避けられなかったと思われる。山名宗全が義尚を担ぎ、細川勝元が義視を担いだので、それぞれが欲しかった大義名分を得た。それで、国を二分してしまうような大規模の戦いになってしまったと思われる。

*6. 富子の恋と密通の噂

【・尋尊の「大乘院寺社雑事記（だいじょういんじしゃぞうじき）」には「日野富子と後土御門帝の恋と密通の噂は「千万雑説」というほど広まってしまった」とある。

・後花園天皇と後土御門天皇に仕えた謹直な人柄の学者・甘露寺親長の日記・「親長卿記」の1473年2月21日の条に「泉殿に行幸有。最密の義なり」とある。花の御所にあった泉殿の座敷で天皇と富子が密会した。義政は小川邸にいて留守だった。

・同じ日記の1473年10月22日の条に「御台の側近の女房・故花山院持忠の娘が富子の北御所で、皇女を出産した。主上より情をかけられてのことである」というようなことが書かれている。

当時、富子は32歳、主上は30歳であった。】

この女房の話と取り違えたとする説があるが、噂の広がり方を考慮すると火の無いところに煙は立たずであって、義政とうまくいっていなかった富子は少なくとも激しく恋をしていたのであろう。それ以上のことは分からない。

富子の和歌に、

『あやしとや猶も涙を人のみむ無名に朽ちる袖としらすは
意識は

『不審であると思って、人々は私の涙している姿を見ている。その私は、根も葉も無い噂に苦しんでいるのも知らないで。』のようである。

富子はこの噂に苦しんでいることを嘆いているのかもしれないが、その場合、根も葉もない噂というのは密通のことだけか？それとも恋の噂も否定しているのだろうか？

*7. 銀閣寺建立の財源

足利義政は隠居後も義尚に決して譲らなかった利権が2つあった。外交貿易権と寺社統制権である。明との貿易によって義政は巨額の利益を手に入れた。その大半を国家運営に使うのではなく、東山の銀閣寺の造営に充てようとしていた。寺社統制権によって寺社などの荘園領主層を山荘の造営に協力させることができた。造営工事は足かけ8年にわたる大がかりなもので、1482年から着工し、義政が亡くなる1490年1月の直前まで施工された。

*8. 応仁の乱終結への富子の動き

富子、応仁の乱終結に尽力

- ・富子、仲たがいでいた足利義政と義視の兄弟を和解させる。
 - ・富子、戦乱の後半から中心人物になっていた西軍の好戦派、大内政弘と幕府の交渉をとりもち、政弘を四方国の守護職として安堵し、官位も上げて和睦させて撤収させた。
 - ・政弘と対立していた乱の中心人物の畠山義就も戦う意味がなくなり京都から退去。その見返りに富子が義就に1000貫（現在の価値で1億円～1億5千万円）を貸し付けた。（一説には贈与とも）
- 周辺には貸したことにして実際は和解金として与えたということではなかろうか？

*9. 義政の寵愛・徳大寺実敦の娘と義尚の三角関係

義尚は父親譲りの所為か、若い頃より酒と女におぼれた。16歳の時に富子の兄・日野勝光の娘を正室に迎えたが、好まなかった。父・義政の寵愛・徳大寺実敦の娘と三角関係にあったからだった。富子は自分の姪の正室を愛そうともしない義尚引き籠ったままであったとの噂があった。夫と我が子が一人の女性を取り合うことに我慢ならなかったのだろう。正月6日に將軍家の親子夫婦が大喧嘩した所為で、誰の参賀も受け付けず、この後も、義尚は幾多の女性問題を引き起こした。富子が義尚を諫めたことに対して義尚が激昂し、富子を疎んじるようになったのであろう。これが義尚の小川御所脱出の最大の理由ではなかろうか？

○花の御所



洛中洛外図より

○銀閣寺



3-4. 富子が悪女とされた要因とその説得性

番号	富子が悪女とされた要因	角度を変えた見方
1	<p>① 重子が義政の乳母・今参局 (いままいりのつぼね) と今参局と通じていた義政の側室 4 名を追放した。</p> <p>日野富子が産んだ子が生まれて間もなく死去すると、今参局の呪詛であるという風聞が広まった。反今参局勢力の守護大名や義政の生母で且つ日野富子の大叔母の日野重子はこの早世を今参局の呪詛によるものと訴え、今参局は琵琶湖の沖ノ島に流罪とされた。配流さ</p>	<p>今参局が政治や人事に口出しすることに対して苦々しく思っていた重子が、富子の子が死去したことに呪詛との言いがかりをつけ、今参局と気脈を通じていた側室を追放した。</p> <p>幕府の重鎮たちは今参局が義政の威を借りて政治に口出しすることを快く思っていなかった幕府の重鎮たちの総意もあって処分されたということであろう。今参局は言いがかりであることを承知しながら、</p>

	<p>れる途中、重子の送った刺客に襲撃されたため自害した。そして今参局と通じていた義政の側室 4 人も追放した。</p>	<p>義政も抗えない状況であることを承知して、自害したものと思われる。 富子は処分を黙認したかもしれないが、発意はしていないだろう。</p>
2	<p>富子が義尚の将軍就任に固執する義政は政治から離れて趣味に没頭したいと願い、早く引退したいとした。なぜか義政は男子が生まれないものと諦めて、浄土寺の僧である弟の義尋（ぎじん）を養子とし後継者とした。義尋は義政の申し出を断ったが、義政が「将来男子が生まれても僧にして、将軍職は必ず譲る」とする誓詞を渡した。そして還俗し、足利義視と名乗る。その直後、政子が義尚を産むことになる。義尚の将軍就任に固執し、山名宗全を後見人にしたことにより、義視が細川勝元に頼ったことにより、対立を生み応仁の乱のきっかけを作った。</p>	<p>・富子は山名宗全か細川勝元のどちらに義尚の後見人になってもらう方が有利かの選択をして、最初は山名宗全を選択した。後に細川勝元の方が有利と思い始めてドライに勝元に乗り換えただけである。 応仁の乱は斯波氏や畠山氏の家督相続を絡めて、宗全と勝元は一触即発の状態にあり、富子の動きが無くても、戦いは行われていただろう。義尚と義視を担ぐのは、双方ともに大義名分を得るためであり、富子が与えたことにはなる。そのために戦乱が拡大した可能性はあろう。が、宗全と勝元の意向でもあった。 富子が義尚の将軍即位に固執したために応仁の乱が発生したということではなかろう。 義尚のことを考えると戦乱は思いの外だっただろうし、早く終結したかったはずだ。</p>
3	<p>将軍の去就に深くかかわった 我が子の 9 代将軍義尚が死去した後、将軍の去就に深く関わったことも、彼女が悪女と呼ばれる一因となっているとされている。 ・富子は義視と自分の妹・良子の中に生まれた足利義植を 10 富子は細川政元と共にクーデターを起こして義植を廃し、義</p>	<p>富子が政治や将軍の去就に関わるようになった発端は義政が十分に政治手腕を発揮できない状況にあって、趣味に没頭し浪費をし始めたことにあるのかもしれない。また息子・義尚は 23 歳という若さでこの世を去った。その最後は酒におぼれ、重い病に罹っていた。その後、夫・義政も亡くなったので、幕府を存続させ、安定を図るためには、関</p>

	<p>政の甥で堀越公方・足利政知の子・義澄を11代将軍に擁立した（明応の政変）。</p>	<p>わるしかなかったのであろう。それにしても、歴代将軍と折り合いが悪かったのは強烈な性格だったのであろう。そのために悪女呼ばわりされる要因になったのかもしれない。義植を排斥するためのクーデターは勝元も同意している。その背景は幕政維持には富子の方が良いということで義植に問題があったということであり、富子の手腕は驚くべきである。</p>
<p>4</p>	<p>蓄財 義尚の将軍就任後、日野富子は幕政への関与を強め、高利貸し、米の投機、関所の新設による関銭の徴収などでさらに蓄財をはかる。</p>	<p>・本来は国政に投入されるべき資金が夫・義政個人の趣味に使われてしまうため、富子は自らの才覚で蓄財し、国家の財政を切り盛りする必要があった。富子が銀閣寺の造営に資金を提供しなかったと非難する声もあるが、国家の財政を運営する立場にあった富子にとってそれは当たり前の話で、むしろ責められるべきは義政の政治能力、金銭感覚、酒と女に溺れたような倫理観の欠如であるといえる。富子が財政危機を乗り越えた。</p> <p>・富子の実家・日野家は積極的に貨幣経済に取り組んでいたため、富子も経済への積極対応という日野家の性格を引き継いでいた。記金融業者と強固な関係を構築していた。富子はお金の力をよく知っていた。そして私財を必要などころには充てていた。蓄財を経済的に困窮する朝廷への献金や献品、内裏の修復や新邸の築造、更には</p>

		戦乱でやかれた神社・仏閣修復などの修復にあて、世の平安を願ったともいわれている。また応仁の乱の終結を図り、畠山義就に帰国のための千貫を貸し与えた。贈与したのであろうともいわれているが、恐らく和解金として与えたのだろう。
5	米の投機で蓄財	戦乱で不足する米を貯蓄するために米蔵を建てる計画があり、誤解され、尾ひれがついた。
6	応仁の乱の終結	富子、応仁の乱の終結に尽力 <ul style="list-style-type: none"> ・富子、仲たがいしていた足利義政と義視の兄弟を和解させる。 ・富子、戦乱の後半から中心人物になっていた西軍の好戦派、大内政弘と幕府の交渉をとりもち、政弘を四カ国の守護職として安堵し、官位も上げて和睦させて撤収させた。 ・政弘と対立していた乱の中心人物の畠山義就も戦う意味がなくなり京都から退去。その見返りに義就に富子が 1000 貫（現在の価値で1億円～1億5千万円）を貸し付けた。（一説には贈与とも）
7	富子が室町幕府を弱体化させた	義政や義尚には幕府を運営する力はなく、むしろ崩壊寸前だった幕府を延命させたとみることにも出来るとする意見もある。

4. 文化人としての富子

富子は財務の才能だけではなく、公家の姫君として高い教養を身に着けていた。和歌・連歌の会にも参加して歌を詠んでいる。宮廷花壇の有力な一員として活躍した。（諏訪勝則氏；文化人としての日野富子）また「一天無双の才」の人

と云われた一条兼人に源氏物語の講義を受けるのをはじめ、積極的に一条兼人と交流した。

5. 謎

・義尚の乳夫・伊勢貞親が義視排斥を企んだ「文正の政変」に富子は関与したのだろうか？義視の後見人・細川勝元と対抗するために義尚の乳母夫（めのとぶ、乳母の夫）として権勢を維持するために企んだのだろうか。富子の意向ではなさそうである。

6. さいごに

近年では、「日野富子＝応仁・文明の乱の火付け役」という見方は誤りとの声が大きくなっている。

確かに日野富子は、義尚を将軍の座につけたいと考えていた。ただし、日野富子が大乱の引き金を引いたわけでは無い。彼女は義尚を将軍にするにはどちらの陣営につけば有利かを見定めて動いただけであり、**主因は管領家や有力な守護大名の家督争い・勢力争いだった**といわれている。将軍家の後継者争いが応仁・文明の乱の原因のひとつであったとしても、主因は管領家や有力な守護大名の家督争い・勢力争いだったと考えられている。

歴史的人物はしばしば都合のよいように造形されてしまう危険性がある。

・わが子足利義尚（よしひさ）を将軍にしたい日野富子が、陰謀を企てたことにより応仁の乱が勃発したといわれ、稀代の悪女とみなされるようになった。しかし、酒色におぼれ、趣味に走り、政治に意欲を見せない夫・義政や息子・義尚に成り代わって、財務の才能を発揮して、政治手腕を駆使して、崩壊寸前だった幕府を立て直した女性と言えるのではなかろうか。多少の色恋があったかもしれないが（なかったかもしれない）悪女呼ばわりされるほどのことではなかろう。

参考資料

・吉見周子氏編；「日野富子の全て」

（吉見周子氏；日野富子とその時代/奥富敬之氏；日野家流、藤原氏の家史/野村敏雄氏；輝ける悪女、悪妻―日野富子と北条政子/島津隆子氏；将軍家の家庭争議と応仁の乱/森本房子氏―将軍家の妻として、女として/渡辺浩史氏；日野富子の経済力の背景/諏訪勝則氏；文化人としての日野富子）

・ウィキペディア

以上